

<講義・演習>

「学力向上を図るための総合的な学習の時間を要とした

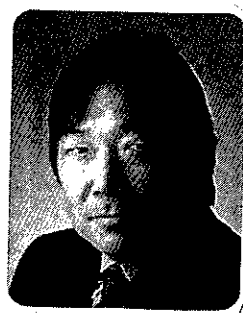
カリキュラムマネジメント」

村川雅弘先生

資 料

- (1) 未来を担う子どもたちに真に生きる力の育成を・・・・・・・・P 1～P 3
- (2) 体験活動の意義と授業づくり・・・・・・・・P 4～P 9

未来を担う子どもたちに 真に生きる力の育成を



鳴門教育大学大学院学校教育研究科
高度学校教育実践専攻(教職大学院)

教授 村川 雅弘

一 先行き不透明な時代を生き抜く子どもたちに

東日本大震災と原発問題は終息の目処が立たず、南海トラフ地震と津波への恐怖は日増しに大きくなっている。世界に目を向ければ、国家間や民族間の紛争は絶えることがなく、大気汚染や異常気象の危険にもさらされている。

子どもたちはこのような先行き不透明な時代を生き抜いていかなければならない。彼らにいかなる難題が降りかかって来るのかは予測がつかない。彼らにどのような力を育むのか。学校教育の果たすべき役割は大きい。

文部科学省は二〇一二年十二月より一年四か月にわたり、「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」を設置し、国内外の諸課題や学力観の動向を踏まえつつ、「我が国の将来を担う子どもたちがこれからの時代に求められる力を確実に身に付け、それぞれの持つ可能性を最大限に伸ばすためには、初等中等教育において

どのような資質・能力を掲げ、教育目標・内容・方法及び評価の在り方をどう具現化していけばよいか」を協議してきた。私もその委員の一人であるが、「次期指導要領改訂では、学校の学びを学校で終わらせない。教科の学びを科学学習に止めない。各教科等で学習したことが生活や将来において、まさに生きて働く力となるためのカリキュラム及び授業の改革が求められている」と理解している。

二 総合的な学習は資質・能力育成の要の時間

これからの子どもたちに求められる資質・能力とは特定の教科等を超えて横断的に育まれる能力である。現行指導要領改訂の礎となった「生きる力」や「キー・コンピテンシー」、キャリア教育の「基礎的・汎用的能力」をより具体化したものである。我が国の様々な学力観を中心にこれからの時代に求められる資質・能力を私なりに分析・整理してみた。その結果、「問題解決力」と「対人関係形成力・協調性・コミュニケーション力」、「自律性・主体性」が共通項として浮かび上がった。様々な課題に対して主体的かつ協同的に既有的知識や技能を活用して問題解決を図っていく力が次代を担う子どもたちには求められている。

総合的な学習の時間では「育てようとする資質や能力及び態度」として「学習方法に関すること」「問題状況の中から課題を発見し設定する」「解決の方法や手順を考え、見通しを

もって計画を立てる」など」と「自分自身に関すること」「自らの行為について意思決定する」「目標を設定し課題の解決に向けて行動する」など、「他者や社会とのかわりに関すること」「異なる意見や他者の考えを受け入れる」「課題の解決に向けて地域の活動に参加する」などの三つの視点が掲げられているが、これらの視点が諸外国及び我が国が求めている資質・能力と一致しているのである⁽²⁾。総合的な学習の時間が先行き不透明な時代を生き抜く子どもたちにとって極めて大切な時間であることが改めて確認できる。

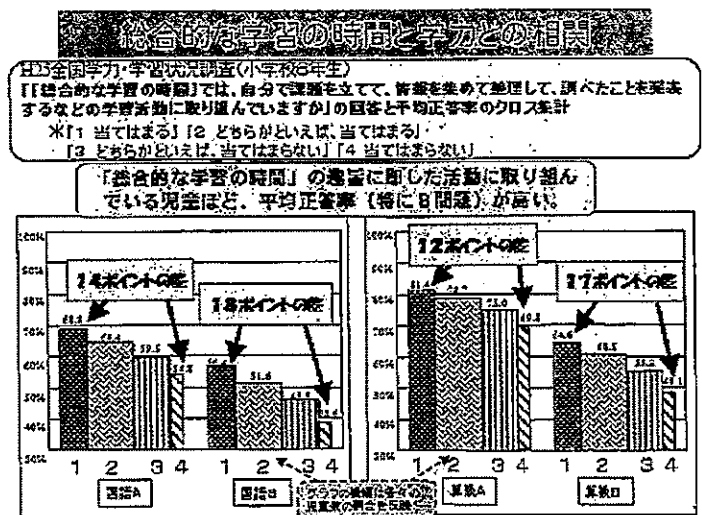
三 総合的な学習と教科学習との関係

現行指導要領改訂の際に、総合的な学習の時間は総則から独立し、解説書や指導資料が作成され、国としては充実化の方向を打ち出しているにも関わらず、国語や算数・数学、外国語・外国語活動等の教科の授業時数確保のためにこの時間の時数が削減された。そのため、学校現場においては必ずしも充実化が図られていない。各校の研究課題からも国語や算数・数学等を中心とした学力向上に重点が置かれている。「総合V S 教科」というとらえ方がまだまだ根深く残っている。

六年間かかわってきた福山市立新市小学校は平成二十一年度当時、表現力やコミュニケーション力、価値判断力、自己効力感において課題を抱えていた。学力面においても課題があった。当時の校長の「体験を充実させ、やりきった感を味

わわせ、自分に自信を持たせたい」という思いから、生活科と総合的な学習の時間の研究を継続的に進めてきた。その結果、平成二十五年度の三年生以上の児童に対する調査においては「課題解決に取り組むこと」や「工夫して伝えること」、「地域の人とかかわること」においていずれも九十五パーセント以上の児童が「できている」と回答し、コミュニケーション等に改善が見られる。学力調査の経年比較においても、顕著な伸びが見られ、広島県の「基礎・基本」定着状況調査結果を見ると、国語及び算数の学力が年々向上し、二十五年度においてはいずれも県平均を十ポイント程度上回っている。

新市小だけでなく、生活科や総合的な学習を主に研究している学校では国語や算数などの教科学力を向上させている。文部科学省による全国学力・学習状況調査と質問紙とのクロス集計の結果が公表され、総合的な学習の時間と平均正答率



との相関がはっきりと示されている。特に、B問題に関して差が顕著に表れている。図は小学校六年生のものであるが、中学校三年生についてもほぼ同様の結果となっている。また、高等学校では、受験指導に傾倒しがちな進学校においても総合的な学習や探究的な学習を重視している学校において進学実績を伸ばしている事例（京都市立堀川高校や岩手県盛岡第三高校、宮崎県立大宮高校など）は少なくない。目の前の問いに対して習得した知識や技能を最大限に繋げて活かして解を導こうとする総合的な学習の学びが、教科学習や大学習受験等においても効果を発揮していると考えられる。

四 教科と総合を繋ぐカリキュラムマネジメント

総合的な学習の重視は教科学習をおろそかにすることにはならない。当然のことであるが、確かな学力と豊かな資質・能力の両方を持ち合わせた人を育むことが大切である。

まず、教職員が子どもの実態と来るべき時代を踏まえて、どんな力を育むべきかを具体化し共有化することが重要である。そして、その目標の達成に向けてどのような教育活動を展開するのかを具体的に策定していくことが求められる。つまり、目標と方法のベクトルを揃えることが改革の一步である。その上で、授業改善に向けて専門性や経験を超えて智慧を出し合い、互いの力量を磨き合うことが必要である。

次代を担う子どもたちに求められている資質・能力を育む

ための授業づくりは教師個人や教科個別で実現できるものではない。総合的な学習と教科学習の両方においての指導の工夫・改善が求められる。例えば、新市小ではでは総合的な学習の時間の全体計画及び年間指導計画において教科等との関連を明確にし、日々の授業でも意識している。二十四年度調査では「国語が他の教科や生活に役立つ」と回答している児童が九十六パーセント、「算数が他の教科や生活に役立つ」と回答している児童が百パーセントとなっており、総合的な学習を中心として教科等との関連的な指導が好影響を及ぼしている。

各学校において、子どもの実態や未来予測に基づく目標設定、その実現のための各教科や道徳、総合的な学習の時間等を有機的に関連させたカリキュラム開発と授業づくり、授業を支える学習環境や組織づくりの整備、校内研修の工夫、日々の実践を通しての評価・改善等々、総合と各教科等を繋ぐカリキュラムマネジメントが求められている。

(1) 村川雅弘「これまでの『資質・能力』を考える」、「教職研修」教育開発研究所、平成二十六年一月号

(2) 広島県福山市立新市小学校「『新市スタディー&マナー』で教職員一丸の学力づくり」、村川雅弘ほか編著『カリマネ』で学校はここまで変わる―』ぎょうせい、二〇一三年

(3) <http://www.nier.go.jp/13chousakekkahoukoku/data/>

体験活動の意義と授業づくり



村川 雅弘

(鳴門教育大学教授)

体験的な学びは生きている

体験活動の教育効果は明確化しにくい。少なくとも体験の渦中にあるときは没頭しているのでそのような意識は働かない。少し時間をおいて振り返ってみたときにその影響や価値に気づく。

私自身、大衆の前で話をすることが多いがその原点は中学一年秋の弁論大会優勝にある。直前の緊張と終わった直後の安堵と達成感は今でもはっきりと覚えている。一つのテーマで論を展開し人に伝えることの面白さ、楽しさもその時に感じたのかもしれない。

また、研究対象として総合的な学習に強い関心を抱くにもルーツがある。中学時代に生徒会役員を三年間務め様々な行事を企画・運営したり、その一環として特別養護老人ホームと交流したりした経験がある。教科学習や部活動だけでは味わえない体験を数多く経験し、それらの体験を通して様々な力が育まれたように思う。しかし、限られた生徒にチャンスが与えられる学校行事や生徒会活動には限界がある。学年や学級の全ての子どもに等しく活躍の場があり、その過程で様々な資質・能力を身に付け、誰もが感動や達成感を味わうことのできる点において総合的な学習には計り

知れない可能性がある。

大学生に体験を尋ねると、飼育栽培やものづくりなど体験的な活動はよく覚えている。しかし、その活動を通してどのような力が付いたのかは実感していない。

先日（平成二六年一月初旬）、二〇年近く前に鳴門教育大学附属中学校の「未来総合科」で様々な体験をした社会人九人にインタビューをした。

「車椅子のことを覚えていて……授業内容を覚えていなくても、フラッシュバックするようなものがある」と、大人になっていくときに何かが広がるきっかけになる。多感な中学生の時期に、いろんなものをちよつとでもかじっておくのはすごく大きい。」（内科医）

「調査の取材に行く時に、アポイントメントの電話を職員室から自分でかけた覚えがある。今まで行ったことのない未知のところへ大人相手に自分がアポイントの電話を入れるなんて中学生ではそうそうない……。何かを調べたいならばまず自分で電話をかけてアポイントをとりなさいという社会への橋渡し役が先生の役割だった……。これは大人になっても全然違う分野のことを知りたいと思つたら、敷居が高くてもと

りあえず電話かけてみたらいいかという風な意識が私のなかにはある……。そういうのが中学生のときに電話をかけることから始まっているのかなって気がする。」（内科医）

「生活科ですごく印象に残っているのが、凧を自分で設計して作って凧揚げをするっていうのを二年連続した。次の年は上手くいったという私の中の小さな成功体験がきっかけで理科が好きになって、今研究をするようになった。」（大学研究所研究員）

小学校や中学校での様々な体験がどのような職業につこうとも生き方や考え方に何らかの影響を与えていることが明確になるインタビューとなった。

体験的な学習で育まれるもの

この原稿を教職大学院のゼミ生との小・中学校への調査旅行中にまとめている。総合的な学習や探究的な学びの中で豊かな体験を通して成長した子どもたちの姿や言葉に何度も感動し目頭が熱くなった。

新潟大附属長岡中の「社会創造科」では二年生と三年生がグループになり地域の業者と連携し様々な商品

開発を手がけている。おやつにいただいたかんずり風味の「柿の種」と塩麴のチーズケーキも、昼食の「ほっこり弁当」も、夕食に出かけたイタリアンの柚子風味の Pasta も全て生徒の発案から生まれた商品である。生徒は数十社の中からアイデアを売り込みたい会社を見つけ交渉する。「ほんまもん」の地域貢献や大人との真剣なかかわりを通して確実にコミュニケーション力や問題解決力、企画力を身に付けている。異学年グループにより社会での先輩後輩関係も体験している。

山古志村の活性化のためのツアー企画を旅行代理店に持ち込んだ三年男子にインタビューの機会を得た。村を知り理解を深めてもらうために多くの人の参加を望みつつも赤字を出さないために価格設定に苦労したこと、チラシやポスターを工夫したこと、そして「観光者と企業が手を取り合って山古志を発信していくことで高め合うことが持続可能な社会だ」と熱く語ってくれた。「将来は何をしたいかな」と聞いてみた。「医者ですが、この病院に来てよかったなと思ってもらえら……」とにこやかに答えてくれた。他の生徒にもインタビューの機会を得た。取り組んだ内容に直接繋が

る進路を考えている生徒はいなかったが、どのような仕事に就こうとも必要となる多様な資質・能力を確実に身に付けていることを実感した。

上越市立大手町小四年は年間を通してかかわっている川での体験を連詩で表現している。隣同士でペアになり、一連ずつ創作し繋げていく。平成二五年七月に訪問した際に特に気に入ったのは次の詩である。

青田川のよいとこしょうかいするよ
一つ目はけしき
水の中から見ると、とつてもきれい
二つ目は仲間
アメンボ、小魚たくさんいるよ
毎日、仲間が へっちゃやうけどね
三つ目は水の色
上流に行くほどきれいだよ
わたしも引っこししたいなあ
四つ目はヘドロ
あんまりきれいじゃないけれど
すこーくあったかい

すっかりザリガニの気持ちになりきっている。実験を通しての感覚が豊かに表現されている。

大手町小の加藤誠雄校長は平成二五年度の大会紀要の中で次のようなエピソードを紹介している。紙幅の都合で一部改変している。

一二月中旬、雪国の冬としてはめずらしく澄みきった青空が広がるさわやかな朝でありました。教務室にいと「失礼します」と元気のよい声が響き、息せき切って入ってくる子どもたちがいました。K男さんを先頭にした四年生の数名でした。彼らは脇目も振らずに四年生担任のところへ行き、こう切り出したのです。「先生、今日の二、二限は生活・総合にしてください」

担任が理由を問うと、「今日は、冬にはめずらしく晴れたいい天気です。このいい天気の日には、是非、青田川の清掃をしておきたいのです」

「でも、今週の計画表では別の学習が入っているよ」

「分かっています。でも、冬にこんないい天気の日はもうないかも知れません。雪が降る前に、僕たちで何とか青田川のゴミを拾ってきれいにしておきたいのです」

その澄みきった目からは、強い思いが感じられました。

「君たちの思いは分かったが、クラスのほかの人たちはどう思っているの」

そんな担任の問いに、「クラスのみんなには、今、提案し

て、みんながそうしたいと言っていました」

その後、しばらくやりとりが続きましたが、結局、四年生は、時間割を変更して朝から青田川のゴミ拾いに出かけていきました。

先頭に立って学級担任に交渉していたK男君は、小さい時から環境の変化に順応することが極めて苦手だったとのことである。豊かな体験が持つ力の可能性を改めて実感するエピソードである。

授業づくりのポイント

体験を通して何かを教えるのではない、子ども自身が何かに「気づく」ことが重要である。そのためには、対象にじっくりと浸らせること、継続的にかかわることが必要となる。例えば、大手町小の四年の子どもたちは学級単位で青田川に年間十回以上出かけるだけでなく、先ほどのエピソードからもうかがえるように主体的に継続的に川とかわっている。

体験活動はそれ自体に意味がある。しかし、体験だけに留まることなく、その時の気づきや思いを書き言葉や話し言葉などで表現させたい。表現を通して体験

したことを関係づけたり意味づけたりすることとなる。またまとめた文章表現まで求めるのではなく、メモやカードあるいはウエビング等で書き残しておいたり、グループでKJ法を用いて簡単に整理し共有化を図ったりしておくことでもかまわない。

例えば、大手町小四年の子どもたちも青田川での体験の後には作文で思いを綴り、イメージマップにより感じたことや気づいたことを繋ぎ創作に役立てている。A小の六年生は身近な地域の史跡を大人や低学年児童に伝えるために紙芝居を作成する活動を行った。課題設定のための初めての史跡巡りの際には、各自が得た情報や気づき、疑問をKJ法により整理することで、調査チーム内で互いに得た情報の共有化と新たな課題の発見を行っている。

子どもたちのカードやワークシートあるいは活動中のつぶやきや姿を通して、教師はそこに表出されたものを価値づけたり、関連づけたりすることが重要である。他の子どもにとっても意義のある気づきや情報は是非とも広げたい。それがきっかけとなり、その後の体験がより豊かになることがある。学習を積み重ねて

いく過程で必要感から子どもの側から新たな体験が持ち込まれることもある。子どもからヒントをもらうこともある。子ども一人ひとりをしっかり見取っておくことが必要である。子どもの発想が単元展開を大きく変えるということも少なくない。大手町小のK男君のように、豊かな体験により子どもたちは大人の枠を大きく飛び出す、設定した目標を大きく超えていく。

体験活動を大いに仕掛けていきたいものであるが、展開する上での問題は安全面やマナー面である。豊かな自然に触れ、地域を探索し、多様な立場や年代の方とかかわる上でこの問題は避けることができない。何よりも日頃のあるいは事前の安全指導を徹底することが大切である。ユニークな取組を紹介したい。

一つはB小六年生が生き方を考えるために行った広範囲での多様な人との出会い体験の際の工夫である。事前に相手方の連絡先や訪問場所、日時や交通手段等を記す「出会い計画書」を出させたり、外出の際の手順や準備物をチェックさせたりする以外に、体験当日の職員室には「お出かけボード」が登場した。そこには付箋が貼られ、各グループの行き先や交通手段、予

定が書かれてある。出先から子どもたちが職員室に電話を入れるとそこにいる職員がボードの「学校発」「現地着」「現地着」「学校着」の枠へ付箋をずらしていくのである。各グループの動向が一目瞭然であった。

一つは子ども自身による安全に関するワークシヨップである。C小学校四年生が「ふせん会議でルールブックを作ろう」というワークシヨップに挑戦した。海岸や川、町をフィールドにした体験活動を行う直前に行った。児童一人一人が三色の付箋に「安全に気をつけること」、「人に迷惑をかけないために気をつけること」、「事前に準備しておくことやもの」を書き、グループで整理・構造化を行った。「海岸や川」「乗り物」「町や店」など具体的な場面・場所ごとに分かれて行い、学級内で共有化のための発表を行った。教師に指示されて行動するのではなく、自分たちで考えて行動することに繋がる取組である。ルールやマナーを守ろうとする意識が高まるだけでなく、想定していない事態に遭遇しても協力して対処できる子どもが育つ。

豊かな体験を仕掛ける授業づくりのための研修

生活科や総合的な学習だけでなく、教科学習においても体験的な活動を仕掛けるために、教師自らが体験すること、体験の場を保证するために地域を知ることが必要である。

年度始めには新しく異動してきた教師もいるので校区内のフィールドワークを行いたい。自然や公共施設、史跡等、総合的な学習や生活科だけでなく、社会科や理科等の教科でも活用可能な「人・こと・もの」に直接触れて把握しておきたい。施設等には事前に連絡しておき直接説明を受けるとより有益な情報を得ることができる。その際には、ただ単に観察するだけでなく、例えば、川に入ってみる、和菓子を作ってみる、史跡の由来を訊いてみるなど、子どもたちが実際に行うことを想定し教師自身も実体験を楽しみたい。一年を通して子どもたちに豊かな体験を仕掛けていく教師は、子どもたちと並行して自らが対象と継続的にかかわり、探究的に取り組んでいることが多い。そのためにも体験活動の主たる対象に教師自身が惚れ込んでいくことが極めて重要となる。